

伊豆大島の火山活動解説資料（令和5年6月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

19日に西方沖を震源とする火山性地震が増加しましたが、20日以降、地震回数は減少しています。過去にも地震活動が一時的に活発化し、震度1以上を観測する地震が多発したことがあり、今回も同様の活動と考えられます。熱活動は低調に経過し、火山性微動も発生しておらず、ただちに噴火が発生する兆候は認められません。

地下深部へのマグマ供給によると考えられる長期的な島全体の膨張は、2018年頃からほぼ停滞しています。これまでに供給されたマグマは地下深部に蓄積されていると考えられることから、今後火山活動が活発化する可能性がありますので、火山活動の推移に注意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴気など表面現象の状況（図1-①～③、図2-①、図5～8）

北西外輪監視カメラによる観測では、剣ガ峰付近や三原山中央火孔などで弱い噴気が時々認められています。これらの噴気活動に特段の変化はありません。16、19、21日に実施した現地調査では、三原山山頂周辺の噴気温度や三原山山頂火口内及びその周辺の噴気や地熱域の状況など熱活動に特段の変化は認められませんでした。

・ 地震や微動の発生状況（図1-④、図2-②③、図4）

19日に西方沖を震源とする火山性地震が増加し、震度1以上を観測する地震が9回発生しました。そのうち最大震度2を観測した地震は1回でした。20日以降、地震回数は減少しています。

この地震活動に伴うカルデラ内の地震の増加は認められず、火山性微動も観測されていません。今期間、震源は西方沖の他にカルデラ内の深さ1～2km付近及び北部に分布しました。

・ 地殻変動の状況（図1-⑤、図2-④～⑥、図3、図9）

GNSS連続観測などによると、地下深部へのマグマの供給によると考えられる長期的な島全体の膨張傾向は、2018年頃からほぼ停滞しています。約1～3年周期で膨張と収縮を繰り返す地殻変動は、2022年2月頃から見られていた収縮の傾向が、2022年10月頃から膨張に転じています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和5年7月分）は令和5年8月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

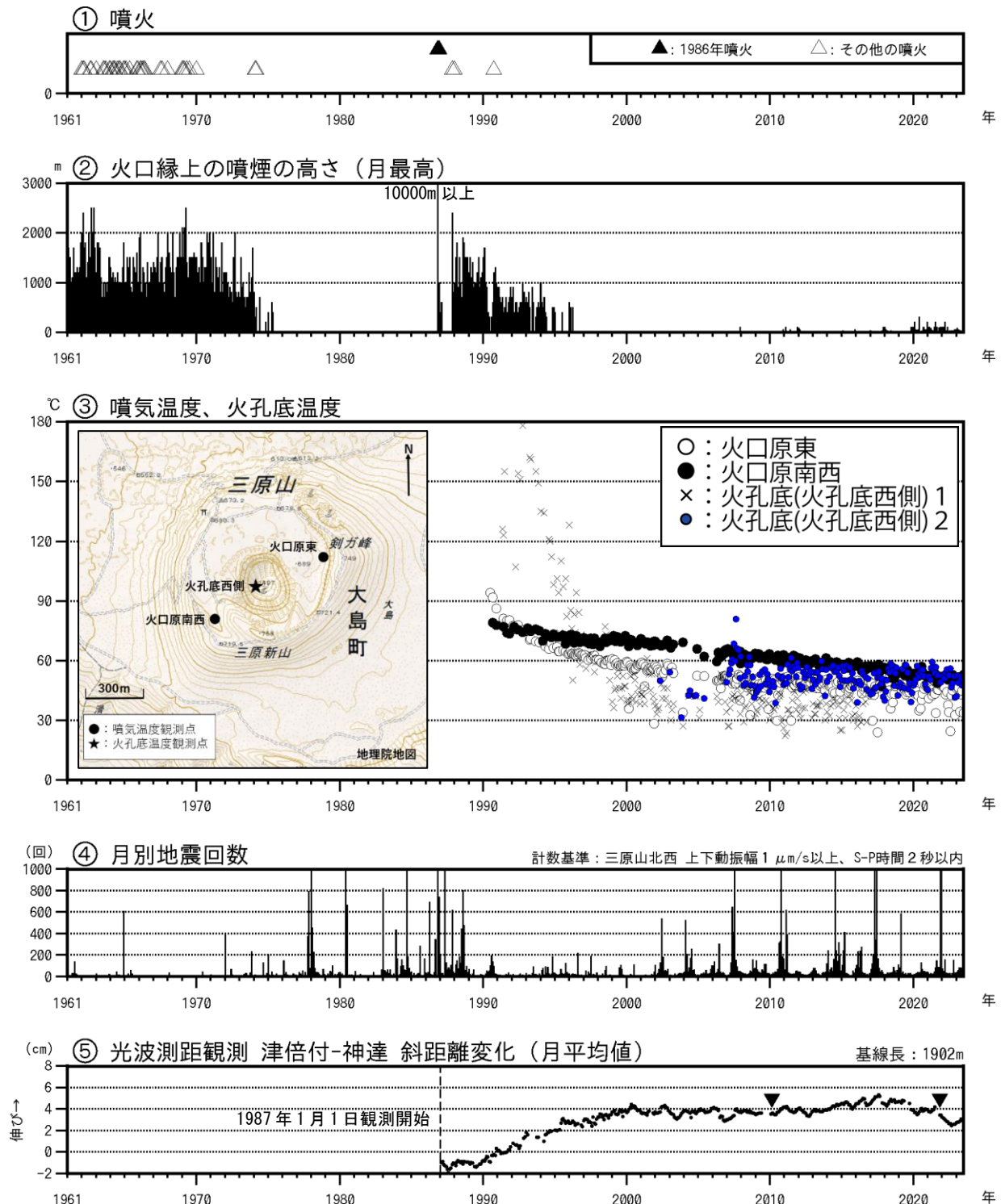


図1 伊豆大島 長期間の火山活動経過図 (1961 年 1 月～2023 年 6 月 30 日)

②1991 年 12 月 18 日までは火口縁上 130m 以上、2002 年 2 月 28 日までは火口縁上 300m 以上の噴煙の高さを観測していました。また、2020 年 6 月までは定時観測、それ以降は常時観測における噴煙の高さの月最大値を示しています。

③火口原東、火口原南西：サーミスタ温度計により直接測定した噴気温度。

火孔底(火孔底西側) 1：赤外放射温度計により離れた場所から測定した火孔底温度。

火孔底(火孔底西側) 2：赤外熱映像装置により離れた場所から測定した火孔底温度。

④1965 年 5 月 24 日までは津倍付観測点(旧大島測候所)で、1965 年 5 月 25 日から 2002 年 2 月 28 日まで津倍付観測点から約 1 km 離れた観測点で、2002 年 3 月 1 日以降は三原山北西観測点で計数された地震回数を示しています。地震回数には伊豆大島周辺海域で発生した地震も一部含まれています。

⑤図 9 の光波測距基線⑦に対応。グラフの空白部分は欠測、▼は機器更新を示します。

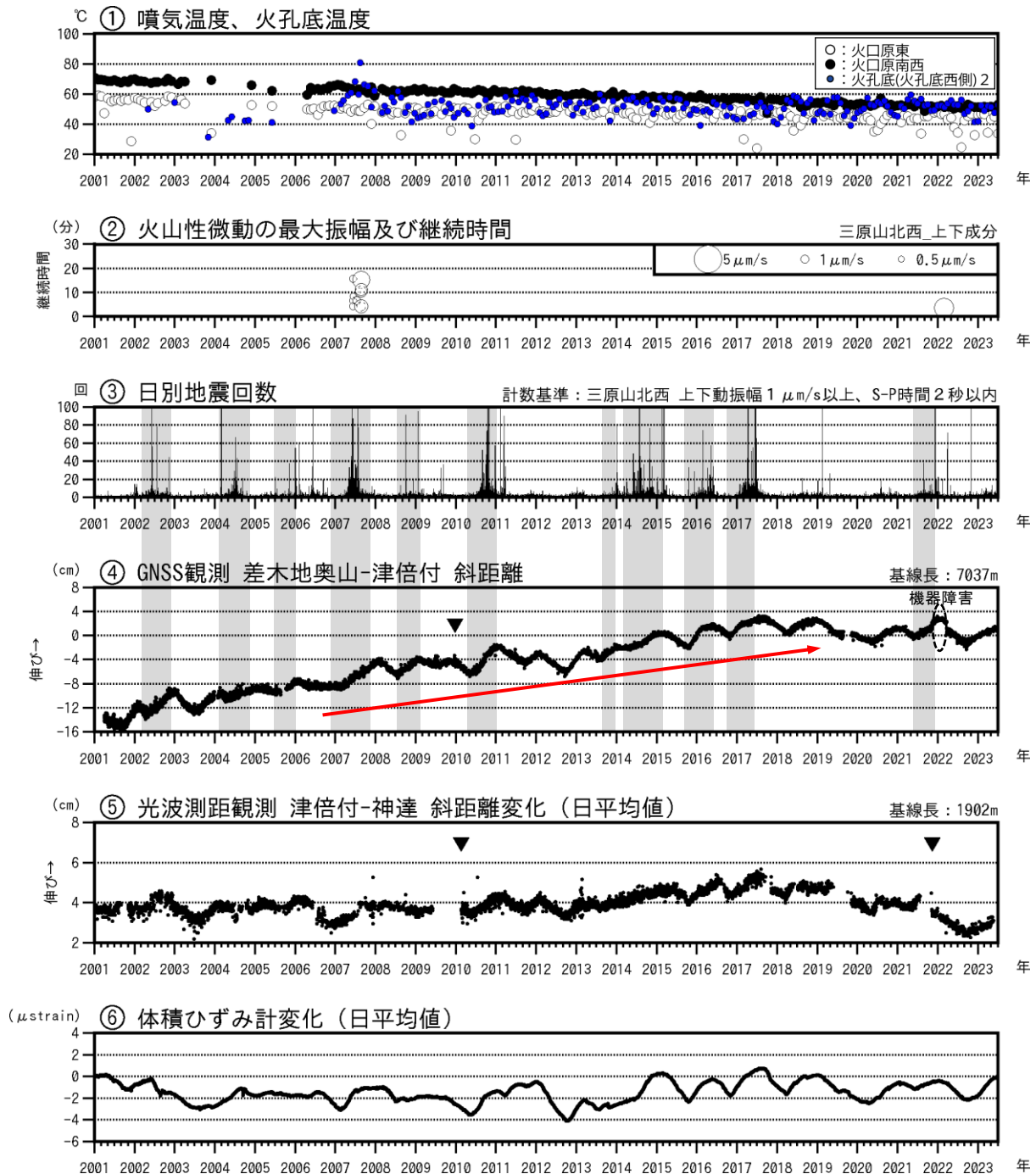


図2 伊豆大島 最近の火山活動経過図（2001年1月～2023年6月30日）

- ①火口原東、火口原南西：サーミスタ温度計により直接測定した噴気温度。
火孔底（火孔底西側）2：赤外熱映像装置により離れた場所から測定した火孔底温度。
- ②2007年6～8月にかけて発生した火山性微動については、北山麓で発生したと考えられます。
- ④図9のGNSS基線②に対応。グラフの空白部分は欠測。▼は差木地奥山観測点の支柱工事を実施。
2010年10月及び2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。
- ⑤グラフの空白部分は欠測、▼は機器更新。
- ⑥体積ひずみ計の変化については、2023年5月からセンサの温度変化に起因する見かけの変動成分及び長期トレンド成分の推定方法を変更して補正したものを掲載しています。

- ・伊豆大島では、地下深部へのマグマの供給によると考えられる長期的な島全体の膨張傾向（④中の赤矢印を参考）は、2018年頃からはほぼ停滞しています。
- ・長期的な島全体の膨張傾向に加え、約1～3年周期で膨張と収縮を繰り返す短期的な地殻変動もみられ、膨張がみられる時期に、これと関連すると考えられる地震活動の活発化がみられることがあります（③④の灰色部分）。

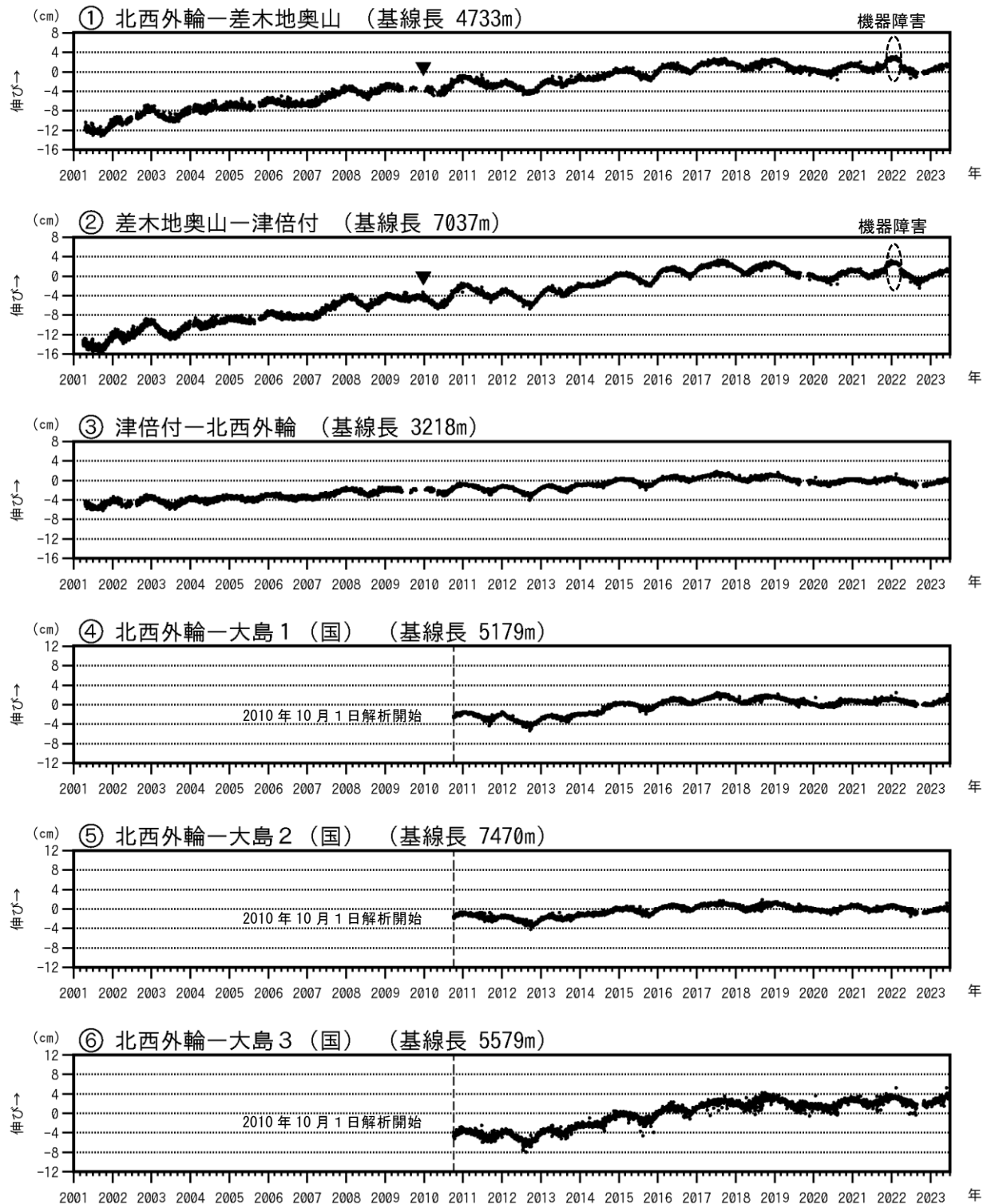


図3-1 伊豆大島 GNSS 連続観測による基線長変化(2001年1月～2023年6月30日)

(国)：国土地理院、①～⑥は図9のGNSS基線①～⑥に対応、グラフの空白部分は欠測。

2010年10月及び2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

▼は差木地奥山観測点の支柱工事を実施。

- ・長期的な島全体の膨張傾向は、2018年頃からはほぼ停滞しています。

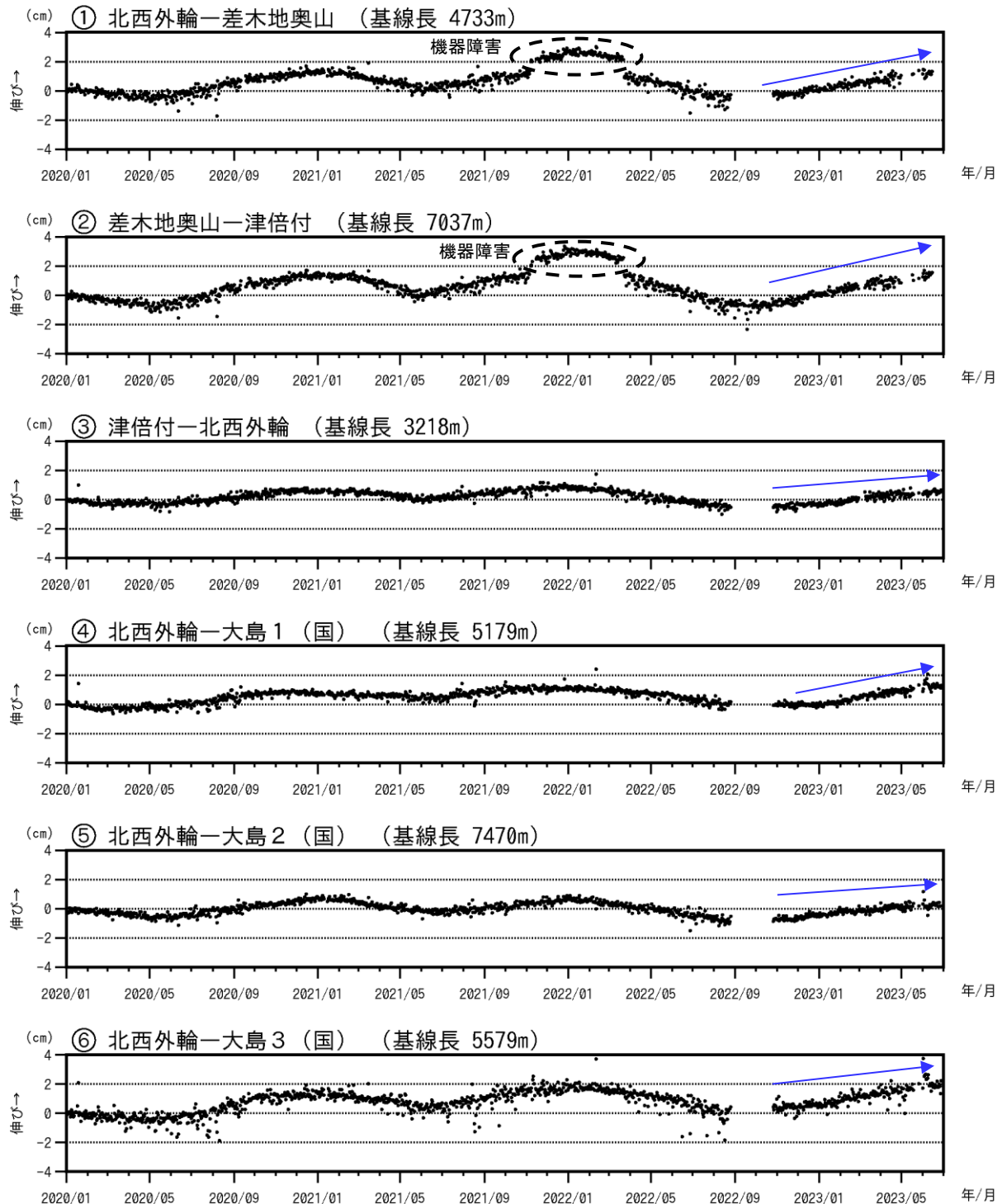


図3-2 伊豆大島 GNSS 連続観測による基線長変化(2020年1月～2023年6月30日)

(国)：国土地理院、①～⑥は図9のGNSS基線①～⑥に対応、グラフの空白部分は欠測。

- ・約1～3年周期で膨張と収縮を繰り返す地殻変動は、2022年2月頃からみられていた収縮の傾向が、2022年10月頃から膨張に転じています（図中青矢印）。

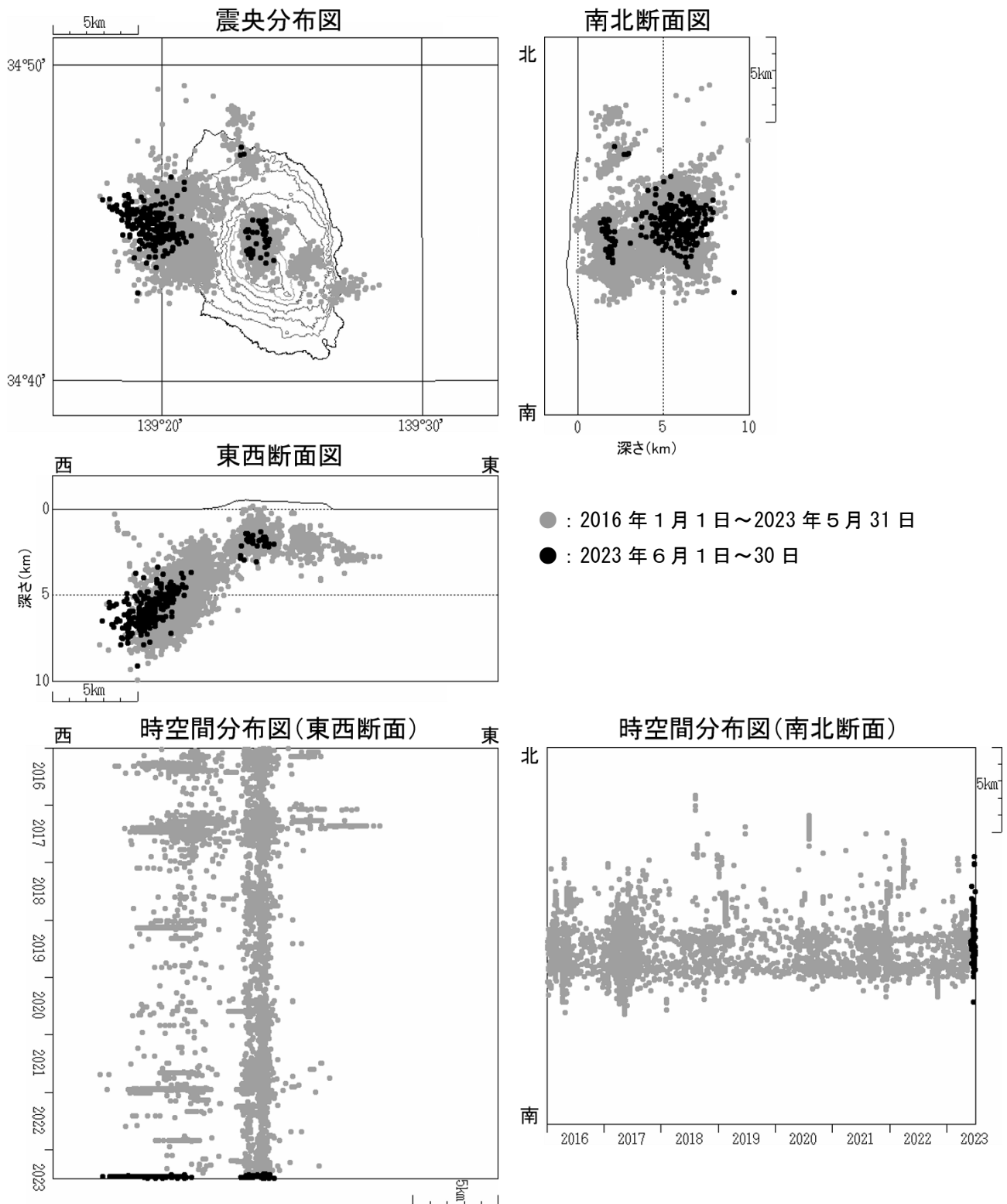


図4 伊豆大島 震源分布図（2016 年 1 月 1 日～2023 年 6 月 30 日）

- ・ 19 日に西方沖を震源とする火山性地震が増加し、震度 1 以上を観測する地震が 9 回発生しました。そのうち最大震度 2 を観測した地震は 1 回でした。20 日以降、地震回数は減少しています。
- ・ 長期的には、地震活動は活発な時期と静穏な時期を繰り返しています。
- ・ 今期間、震源は西方沖の他にカルデラ内の深さ 1 ～ 2 km 付近及び北部に分布しました。



山頂部（6月19日、北西外輪監視カメラによる）



剣ガ峰付近（6月21日撮影）

図5 伊豆大島 三原山山頂部及び山頂火口の状況（撮影方向は図8参照）

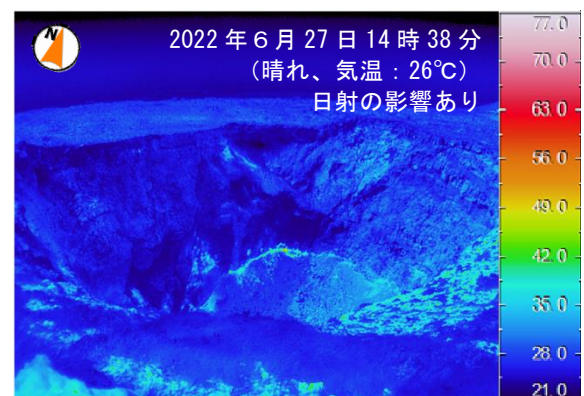
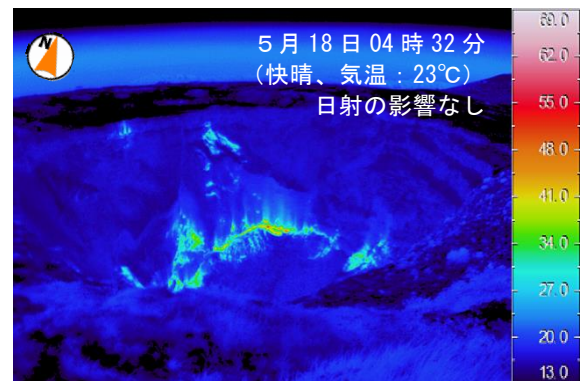
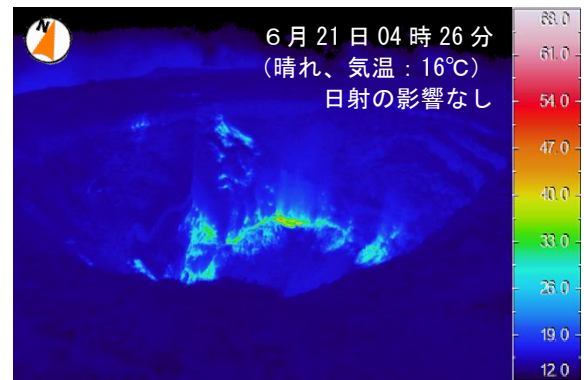
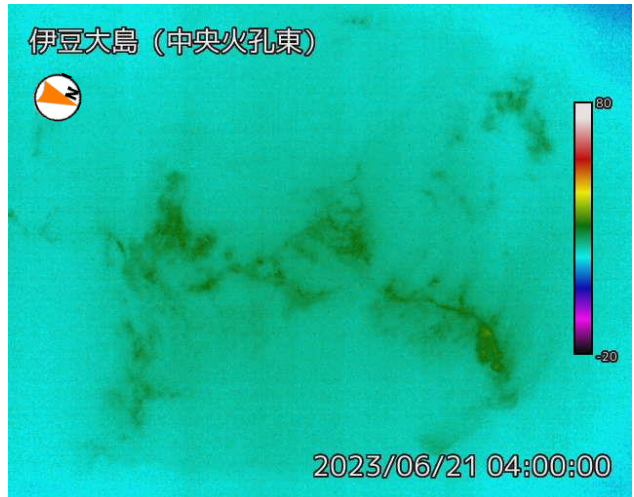


図6 伊豆大島 中央火口内の状況（撮影方向は図8参照）

- ・ 前月（5月）および前年同月（2022年6月）と比較して、中央火口内の噴気の状況や地熱域の広がり等いずれも特段の変化は認められません。



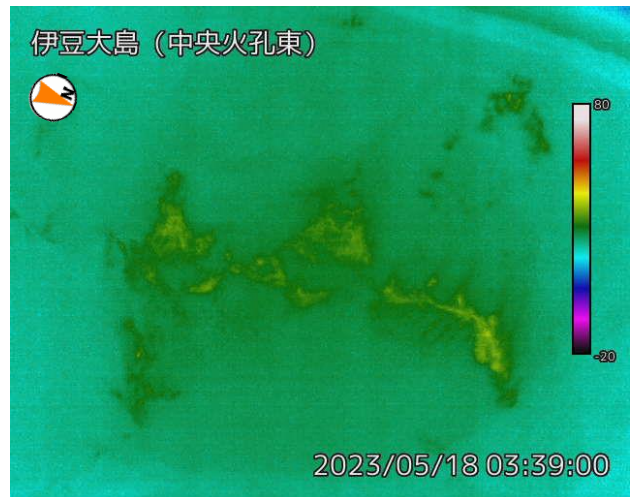
中央火孔東カメラ位置からの可視画像
（6月21日 現地調査時に撮影）



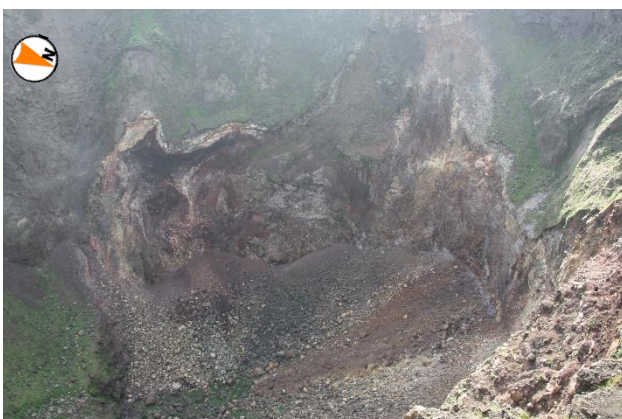
6月21日 中央火孔東監視カメラによる



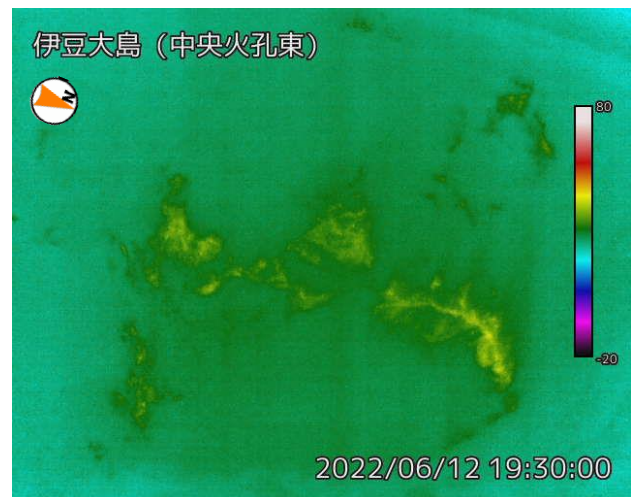
中央火孔東カメラ位置からの可視画像
（5月18日 現地調査時に撮影）



5月18日 中央火孔東監視カメラによる



中央火孔東カメラ位置からの可視画像
（2022年6月27日 現地調査時に撮影）



2022年6月12日 中央火孔東監視カメラによる

図7 伊豆大島 中央火孔内の状況（火孔内拡大、撮影方向は図8参照）

- ・前月（5月）および前年同月（2022年6月）と比較して、中央火孔内の噴気の状況や地熱域の広がり等いずれも特段の変化は認められません。

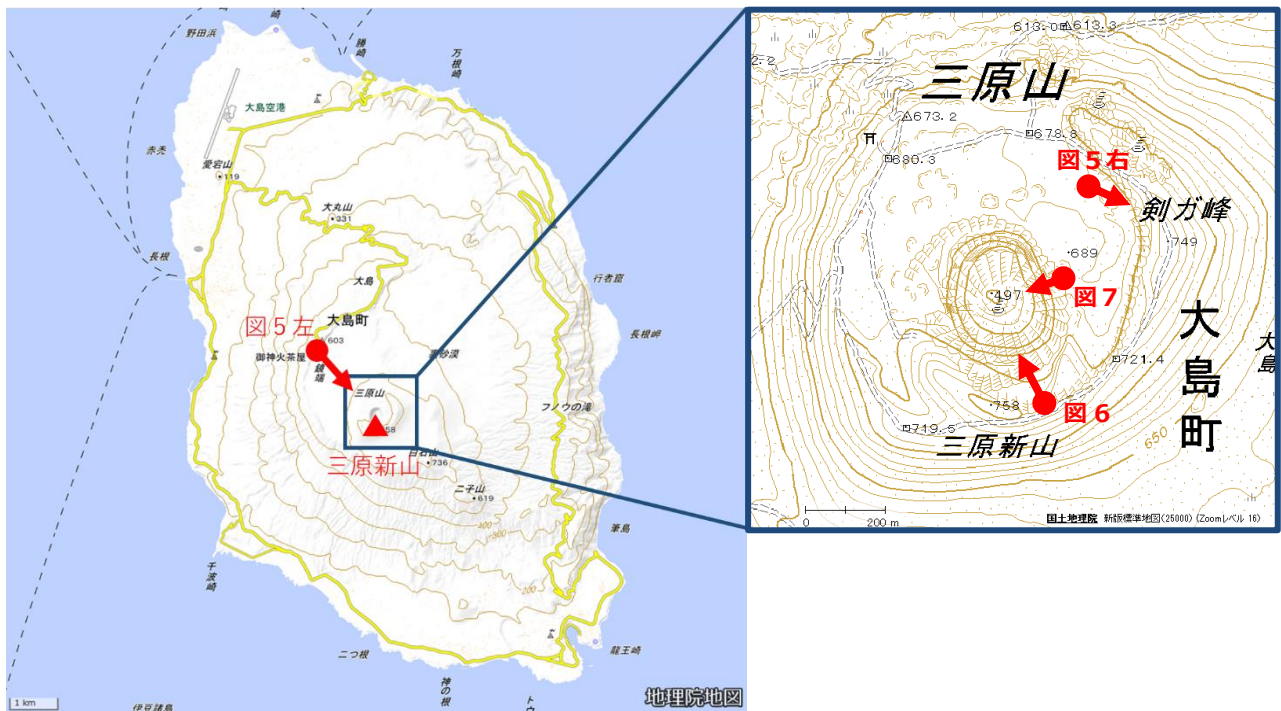
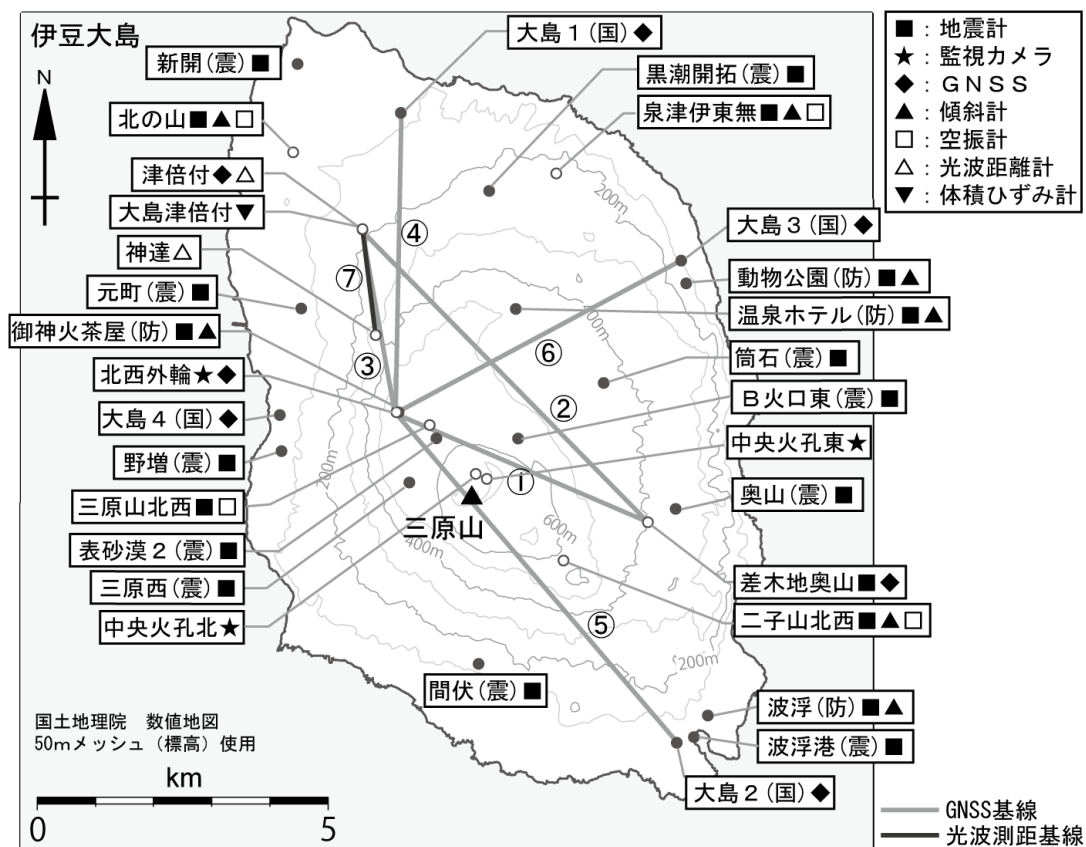


図8 伊豆大島 現地調査での撮影位置・撮影方向、及び監視カメラの位置・撮影方向
(赤丸：撮影位置、→：撮影方向)



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所、(震)：東京大学地震研究所

図9 伊豆大島 観測点配置図

図中の②は図2のGNSS基線④に、①～⑥は図3のGNSS基線①～⑥に、⑦は図1の光波測距基線⑤及び図2の光波測距基線⑤に対応。